異世界のレシピ

猫鍋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界のレシピ

【Ｎコード】
Ｎ８６６７Ｓ

【作者名】
猫鍋

【あらすじ】
電車にひかれたわたしはいつの間にかまっ白な空間へここはどこ？　と思っていたら天使様からあの世は満員だから、三つ願いを叶えてやるかわりに異世界へ行けと、言われ願いを言っただけなのになぜか天使様の逆鱗に触れてしまい、本来なら願いを三つかなえられるはずだったのに一つも叶えられることなく異世界へ飛ばされてしまった。
わたしは何の準備もなく異世界で生き残れるのだろうか？

プロローグ

あっと思った時には時すでに遅く、わたしの体は線路上に投げ出され目の前には電車が迫っていた。
そのとき電車とわたしとの距離は1メートルもなく、回避するのは絶望的だった。
電車に轢かれる際の激痛とともにわたしは意識を手放した。線路にはきっとぐちゃぐちゃになったわたしの肉片や血などいろいろなものが散乱していると思う

わたしはいつの間にか、まっしろな空間にいた。
「ここどこ？　わたし今まで何してたんだっけ？」
そう言いながらわたしは周りをきょろきょろと見る。
「ようこそあの世へ小鳥遊凛（たかなしりん）」
「だれ！　というかあの世ってわたし死んだの！？」
声のしたほうを見れば筋肉質の渋いおじさんがいつの間にか立っていた。年は４０くらいだろうか？
「そうだお前は死んだんだ。駅のホームで突き落とされ死亡とここに書かれているし、なにより死ななきゃここにはこられないちなみに俺は天使だ。」
だんだんと思いだしてきた。学校の帰りに駅で電車を待っていたらいきなりホームから、突き落とされてそのまま電車に轢かれて死んだのだ。わたしに何の恨みがあったのだろう、覚えている限り記憶をさかのぼっても人に恨まれるようなことなどした覚えがない。
「あの、わたしを突き落としたやつはどうなったんですか！？」
「捕まるみたいだな。防犯カメラに姿が写っていたらしい」
おじさんが新聞を見て教えてくれる。あの世にも新聞はあるらしい。
「よかったぁ」

そのまま逃げられていたら死んでも死にきれないところだった。
「それでお前の今後のことなのだが、異世界に行く気はないか？」
「異世界ですか？」
「あぁ」
「ちょっと質問させてください。その世界に魔法やおいしいものはありますか？」
「あぁ、どっちもいくらでもある」
おぉ、それは剣と魔法の世界じゃないか？　子供のころゲームや漫画を見てこんな世界があればいいなと思ったりもしたけど、まさか実現するとは思ってもみなかった。それを聞いたわたしの答えは1つしかない。
「いきます！」
「じゃあ、行く前に願いを三つだけかなえてやるから望みを言え」
「神様と同じ能力をわたしに下さい！」
「神様と同じ能力……だと？」
「「はい、全智全能なる神様と同じ能力です」
「人間風情が神様と同等の力を持とうなどと思いあがりも甚だしい《はなは》！　そんなこと言う奴にはもう何もやらんそのまま異世界へ行け！」
天使は鬼のような形相でそう言うとわたしを異世界へと飛ばした。
異世界について何も知らないわたしは異世界で生き残れるのだろうか？

プロローグ（後書き）

誤字脱字や変な表現があれば教えてください。
誹謗中傷はおやめください。作者のハートを傷付ける恐れがあります。
５／１４修正しました。
ですます調で続けるのなんて不可能やったんや！

謎の男

いつのまにかわたしは背の高い木々が生い茂る鬱蒼（うっそう）とした森にいた。あたりを見渡しても整備された道なんてものはなく雑草が腰のあたりまで生えていて非常に歩きづらそうだ。

どっちへ行ったらいいか分からず困ったなそう思った時だった突然あたりからガサガサと草が擦れる音がする。音はどんどん大きくなりやがてわたしの前でひと際大きな音をたてて白いなにかがくさむらから飛び出した。

「うわっ」

飛び出した勢いのまま白い何かがわたしにのしかかる。とっさのことだったので反応できずわたしはそのまま後ろに倒れた。

「犬……？」

あらためてみれば白い何かは犬らしかった。耳がピンと立ち鼻が長く犬歯が鋭い、正確に測ったわけではないので誤差はあるかもしれないが、犬にしては大きく体長３ｍはあるだろう。体毛は全体的に白い

「シロいきなり走り出してどうしたんだ？　食べ物でも見つけたか？」

シロとはこの犬の名前だろうか？　白いからシロなのだとしたらずいぶん安直な名前だ。

森の向こうシロが来たほうから男が声を張り上げる。シロはいまだにわたしの上に乗っているため身動きが取れず周りには腰まである草に囲まれているので、男の顔は見えないが草をかき分ける音を、させながら男はシロの元へと近付いてくる。草をかき分ける音はだんだん大きくなりやがて目の前の草をかき分けて男が姿を現した。

服の上から見てもはっきりとわかるがっちりとした体顔は、長くのびた黒い髭と黒い髪に覆われていてよくわからない。

「シロお前、珍しいやつ見つけたなぁ」

珍しいやつとはわたしのことだろうか？　少し疑問に思うもそんなことはたいしたことではない。わたしの上にはいまだにシロが乗っているのだ。それなりにでかいのですごく重いのだ。
「この犬どかしてください」
「おぉすまんな。シロおいで」
男がそう言うとシロは男のほうへ歩いて行く。一体なんだったんだ。ちょうどいいこの男に町の方向を聞こう。
「町へ行くにはどっちへ行ったらいいですか？」
「その格好で町に行く気か？　やめといたほうがいいと思うぜ？」
言われてみればわたしの恰好は死んだ時のまま制服だった。持ち物も財布、体育ジャージ、ルーズリーフ、筆記用具だけだ。財布にはお金も少し入っているがこの世界では紙くず同然かもしれない。
「う、あなたには関係ないじゃないですか！」
「いや、関係ある俺も日本人だ。ここで死なれると寝覚めが悪い立ち話もなんだしついてこい」
そう言うと男はわたしに背を向けシロを伴って歩き出した。いろいろと聞きたいことはあるが男はすでに歩きだしている。どこからともなく聞こえてくる獣の声におびえながらわたしは男のあとを追って走り出した。

謎の男（後書き）

早くかけるよう頑張ります

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8667s/

異世界のレシピ

2011年7月18日03時17分発行